宮崎縣西都原古墳調査報告書

宮崎縣西都原古墳調査報告書

宮崎縣西都原古墳調査報告

小官等昨年末より本年一月上旬に亘り宮崎縣下に出張を命ぜられ同地兒湯郡妻町に至り、數年來東西兩京大學に於いて繼續事業たる西都原古墳群の發掘調査に從事したり。本年度の調査は一月四日より着手して五日間に亘り、東京帝國大學より出張の同大學文科大學講師原田淑人氏と業を共にし、其の後半には本學教授文學博士原勝郎氏また之に參加せり。今事業の經過の概要を誌さんに、一月四日一行西都原古墳群を巡視して今次調査すべき古墳の選定をなし、五日午前、主として發掘すべき船塚古墳前に於いて祭典を行ひ、引續き人夫十三人を役して此の塚の後圓部の調査をなし午後一時半頃遺物を發見せり。六日は同塚後圓部の調査を了したる後人夫を二組に分ち、其の八人を以て前方部の發掘をなし他の

一組を以て葺石の有無を調査し。午後四時に至り之を終れり。七日は午前中人夫九人を用ひて無號A塚を發掘し。午後は七人を以て無號B塚の調査を行ひ、翌八日は以上三基の古墳より發見遺物の整理をなして茲に調査を結了せり。次に是等古墳に關する調査の結果を報告すべし。

大正六年三月十五日

京都帝國大學文科大學助教授　濱田耕作

仝　　囑托　梅原末治

船塚

一、外形

船塚は西都原の北部、臺地端に近く存在せる大古墳にして地は上穗北村大字南方の域に屬せり。封土は二段に築ける完美なる前方後圓形をなし、北西向す。大さ塚の主軸の長さ三十二間前方部は基底の幅二十一間半、高十九尺、後圓部の直徑約十七間、高畧ぼ前方部に等しく、中央クビレ部は幅約十三間、高十六尺あり(第一圖參照)周圍には湟なく後圓部の東方廿餘間に陪塚と認めらるゝ一小古墳を伴へり。

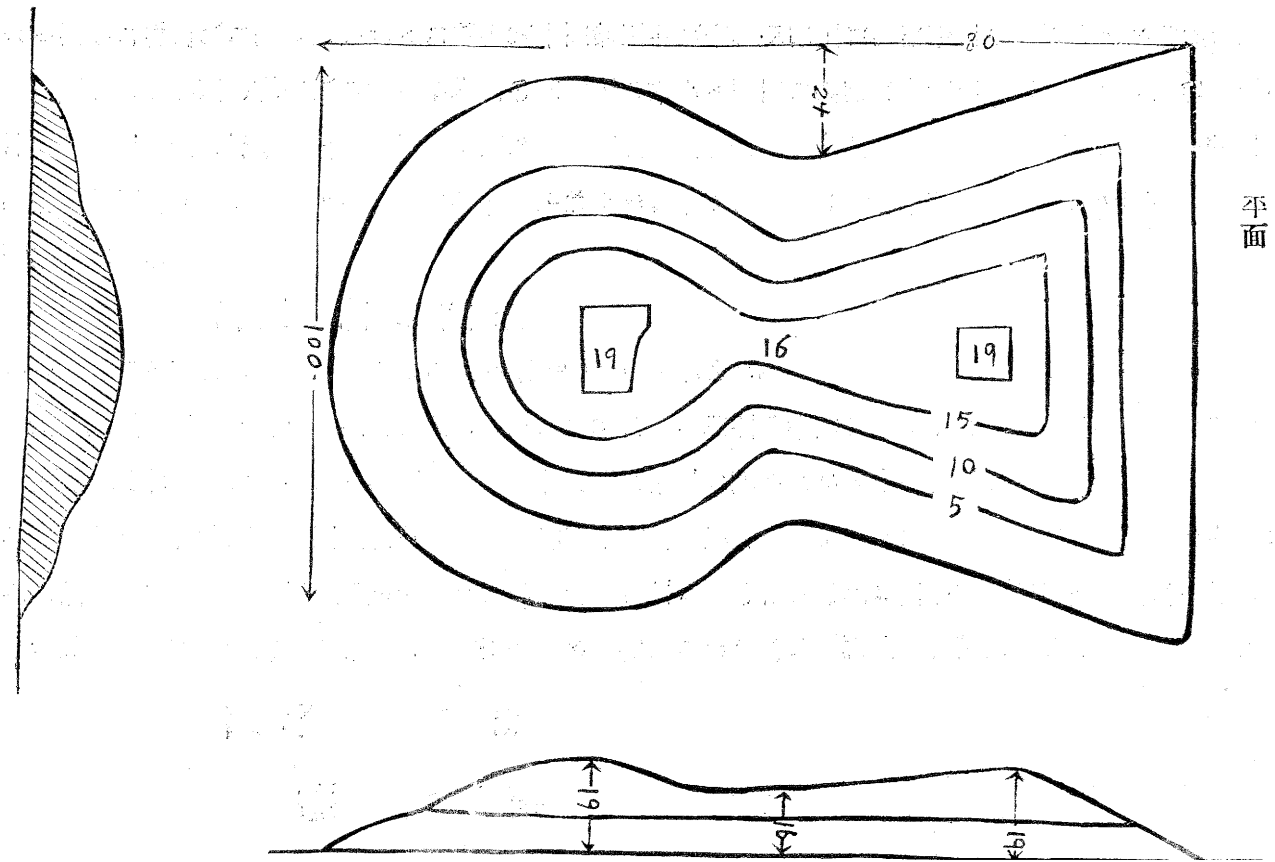
塚の周域は前方のみ畑に接し、他の三面は松林なり。封土の全面は雜草を以て被はれ古松の切株四五を存せるのみにて樹木なきを以て明白に其の全形を見るを得べし。

二、調査の經過

(1)後圓部の發掘

調査は後圓部より初めて其の頂上に主軸に平行せる縱十尺、横十八尺の一區を劃し表土を除去して發掘に着手したるが、此の部分に於ては葺石を認めず、封土は輕鬆なる黑色土なるを以て發掘容易にして深三尺に及び稍黃色の土を混じ約四尺にして發掘穴の南西壁に接せる西部に直刀の一部分を發見したり。卽ち此の部分より南方に約二尺に掘り擴げたるに漢式鏡一面管玉十九個、直刀三口、刀子二口の存せるを發見す。(第二

第一圖　船塚平面及斷面圖　縮尺約五百分之一



平面

斷面

圖參照）依つて更に此の前後を調査せるに前方卽西北部約二尺餘に亘り前者と同一平面上に矛首一個鐵鏃多數を發掘せり。是等の部分は遺分の存在せし以下約一尺餘を穿ちて精査せるに何等棺槨の存せし形迹を認めず土質は多く黃色にして堅きを增せるのみなりき。

今以上列記の遺物配列の狀態を見るに全体は塚の主軸に從ひ前後に長く存在せり。卽ち後圓封土の中心よりは約六尺南方に偏して徑三寸八分の漢式鏡一面背を上にして存置し、鏡緣に少しく重なりて北側に、刄を北に鋒先を西々北に向けたる長二尺七寸餘の直刀Aあり。是と約三寸の間隔を距てゝ北方に略ぼ平行して而も刄を西南に鋒先を東々南になせる最初發見に係る直刀B存す。鏡の南方には約一寸二分の距離に直刀Aと同一方向に置ける長三尺四寸七分の直刀Cあり。直刀Aと直刀Bとの間に亘り鏡より西北方約一尺に刄を北に鋒先を西にして殆んど相重なれる二口の刀子存したり。而して鏡の周圍及び其の東南部の直刀間より管玉十九個を發見せり。內七個は直刀と同一平面若しくは其の上部に存し十二個は是等の下部數寸の間に散在せるものなり。（第三圖參照、此の排列圖中實線を以て表はせる管玉は前者に屬し、點線の部は後者を示す。）鐵鏃は直刀Bの莖端より約八寸の地點より初まり之より西方に約二尺に亘り多數散在せるにて存置の部分厚きは五寸に及び其の西北端に鋒先を西になせる長八寸五分の矛首横はり、之に接して大形の鐵鏃數個ありたり。（第三圖參照）遺物の存在せる地區前後約七尺なり。埋葬されたる遺骸は殆んど存せず僅に鏡面に密着せる麻布片に骨灰の一部分の殘れるを認めたるのみ。而して朱は鏡背に染みまた管玉二個に各小量附着したり。

さて以上の遺物の埋沒が上記の如く著しく南に偏せるを以て其の調査を終りて後中央部の發掘を續行せるが深さ六尺に近づけるもこの部に何等遺物の埋葬せられし形迹なきを以て工事を中止せり。

(2)前方部及葺石の調査

前方部は主軸に平行して縱十二尺横十尺の區域を發掘して陪葬の有無を驗したるが、此の部また葺石なく土質黑色にて深五尺以上に及ぶも何等遺物の存在する形迹なかりき。

別に後圓部の南西腹及び南腹に頂部より外側基底に近く、幅二尺の溝を穿ちて表土を除去し埴輪圓筒及び葺石の存在如何を調査なしたるが埴輪圓筒は是を認めざりしも、現存封土の表面より約七寸にして第二段の傾斜面に徑五六寸の圓形石の葺石を施せるを知れり。此の葺石は塚の基底より高三尺餘に初まり頂部下に至る配列比較的粗にして帶狀を作りて表土を環れるものなり。かくて各部の調査を終れるを以て工事を止めたり

三、遺物の研究

さて上記後圓部に於ける埋葬の遺物の品目を列擧すれば

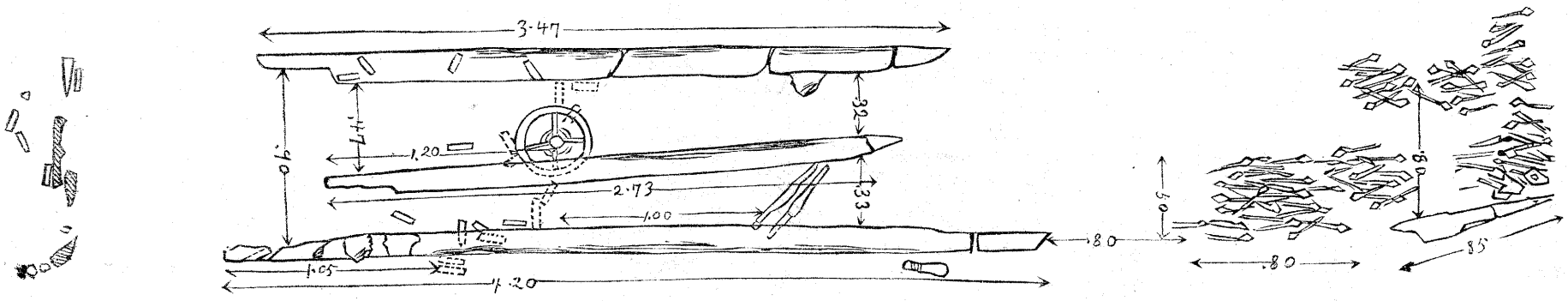
漢式鏡　一面

麻布片

管玉　十九個

直刀　三口

第三圖　船塚後圖部遺物排列圖　縮尺十分之一



刀子　二口
矛首　一個
鐵鏃　百數十個

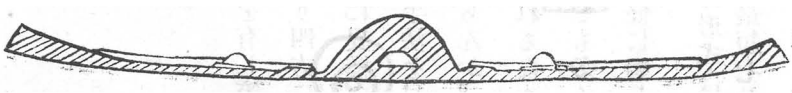
なり、次に是等の遺物に就いて形式特徴を記して其の性質を明にせんとす。

(一)漢式鏡　徑三寸八分あり。銅鏡にして鈕形、徑六分五厘高三分完好なり。鏡面は約一分の彎曲を有し第四圖の下部に示すが如き斷面を呈す。鏡背の文樣は同圖の如く鈕を繞りて一段高き素帶あり、是より四方に帶狀の突出部ありて畧十字形をなし、內區は之を以て四分されて其の各の中央に圓座乳を置き周圍に異樣の唐草文を配す。構圖漢代の瓦當文に似て未だ他に類例を見ざる珍奇なる形式に屬せり。而して其の手法を見るに現はされたる文樣正確鋭利ならず模倣の跡の認むべきあれば恐らく本邦人の手になれるものならんか。

(二)麻布片　前述の如く鏡面に附着して存在せるものにして埋葬に際し鏡を被へる布の一部分の殘れるなるは明なり。かゝる例は從來古墳より鏡の發掘せらるゝに際し少なからず認めらるゝ事實なり。然れども多くは絹なるに此の布の麻なるは稍異なりと云ふべく、其の織方を驗するに五分平方に於いて縱糸十八條に對し横二十八條を用ひ比較的整濟なるを見る。また以て古代に於ける麻布製作の技術を窺ふべし。

(三)管玉　十九個　何れも碧玉卽ち出雲石製にして內一個小破損あり。最長九分四厘徑三分三厘、最短七分四厘徑三分なるが大抵は長八分內外徑三分內外のものなり。たゞ中央の孔の貫通の形式には三種あり卽ち稍斜

第四圖　船塚發見漢式鏡



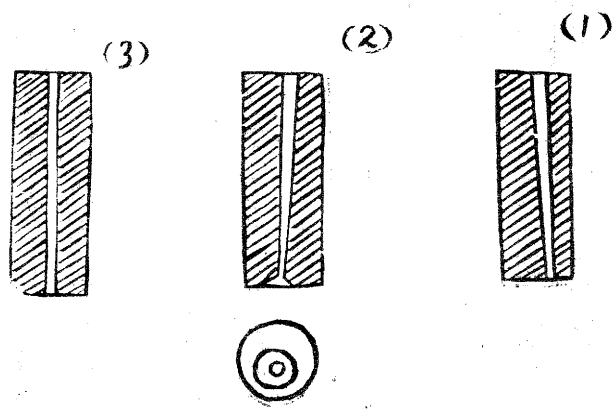
に貫通して一端大に他端小なるもの其の一にして此の形式のもの十個あり。二は是と略ぼ同一なるが其の一端の小孔の周圍開きて圓錐形をなせるもの、三は孔が中央に垂直に貫通せる形にして僅に一個なり。

（四）直刀　三口　何れも一部分缺損あるが鞘柄の木片身に密着せる爲比較的腐蝕少く全形を見るを得べし。直刀B最も長くして現存の總長四尺二寸又渡り一寸四分あり莖の一部分を缺損せり。直刀Cは三片となれるが略ぼ全形を存す。身の長三尺又渡一寸五分背の厚二分五厘あり、鞘の木片全体に約五厘内外附着す。柄部は莖の長四寸八分ありて目釘孔二個を有し頭の部分二寸一分に漆作りかとも思はる柄の拵の一部分を存したり。而して三口ともに形式は普通の平造にして横斷面楔形を呈し其の鋒先が弧線をなすものなり。

（五）刀子　二口　殆んど同形にして一は破損して二片となる。總長五寸内外又渡り八分あり。鋒先の形式は腐蝕して明ならざるが稍直線に近き形を採れるものゝ如し。

（六）鐵鏃　發見の鏃は之を分ちて先づ大小の二類となすべく、大部分は小形にして大形は數個のみ。破損腐蝕

第五圖　船塚發見管玉斷面圖（實大）



甚だしく完形を存するもの少きが更に詳細に之を驗すれば第六圖に示すが如き七種に分つべし。中に就いて最も多數を占むるは(a)の形式にて、篦代完全なるものにては三寸五分あり。(e)は二個(f)(g)は各一個を存するのみ。

四、發掘の結果

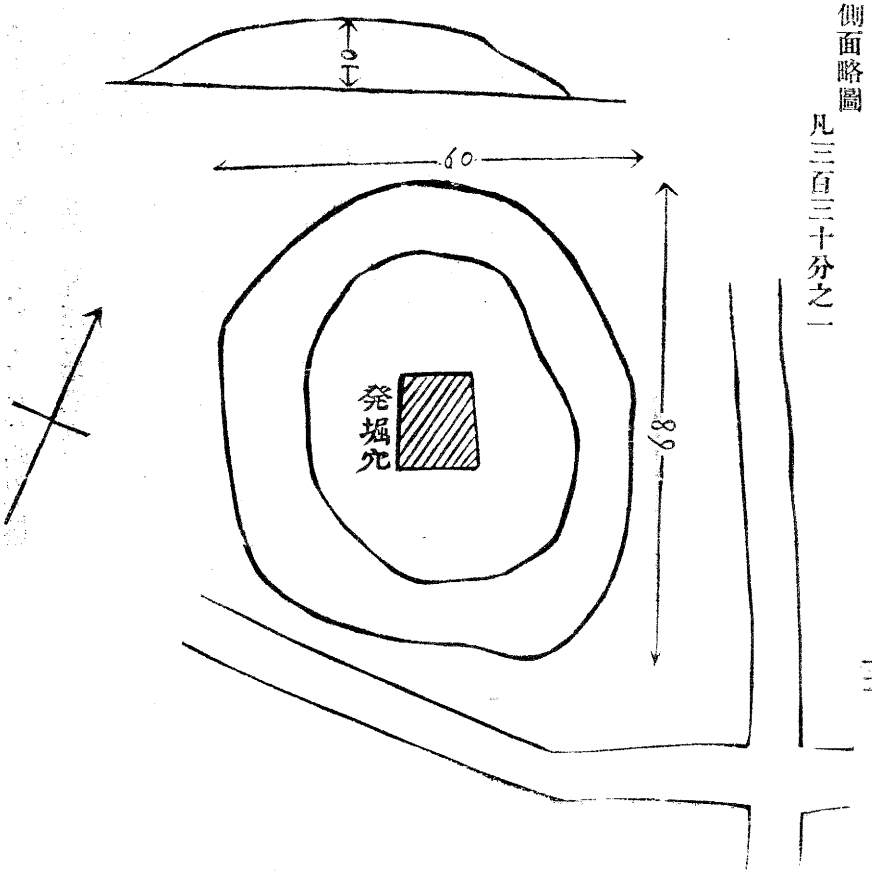
上來記述せる遺物の埋沒狀態及び其の種類形式を通觀して吾人の感ずるは土器の全く存在せざりしと、遺骸埋葬の位置が中央より甚だしく偏したりし事なり。而して更に此の墳墓が封土に比して構造の內容の頗る簡單なるの事實を擧ぐべし。是等は此の古墳の性質年代を考ふる上に注意すべき點なりとす。

土器は西都原古墳群に於いては從來調査せる例に徵するに東南部方面に散在せる大小の古墳よりは出土せるも北部に於いては殆んど其の存在を見ず。之は兩者の營造の差異の著しき一とも認むべく從つて其の年代に就いても相違を示せるものなるや知るべからず。

構造の內容の簡單なる事實は一見內容の構造の壯麗を極めたる時代に先てる大土工的墳墓營造の時代に屬するに非ざるかを想像せしむるも、詳細に發見の遺物を驗し埋沒の狀態を見るに、吾人が確認せる多くの大土工的墳墓の形式と頗る異なるものあり、殊に鏡の製作の手法よりせば寧ろ古墳營造時代の衰頽期に當れるものと解するの穩當なるを思ふ、卽ち西都原古墳群に於いて對比を求めんか吾人は是をメサオ塚オサオ塚に先だてる形式と認めんよりも、寧ろ鬼之窟古墳以後の時代に屬する此の附近に多き小古墳と同時代のものに

してただ外形のみ古式に依つて營まれしものと信せんとす。ただ此の古墳に於いては前述の如く年代の考定上最も準據とすべき土器類を全く發見せず、且つ西部原古墳調査の事業未だ完からざるを以て今日に於て此の推定を一層明確になす能はざるなり。

第一圖　無號A塚平面及側面略圖　凡三百三十分之一



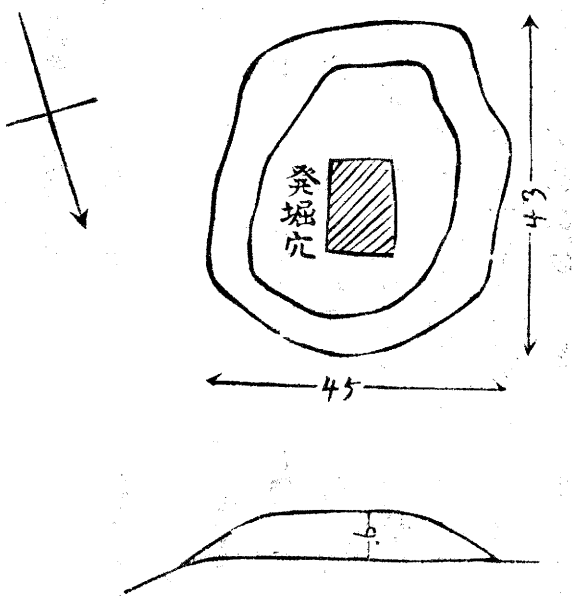
無號A塚

本古墳は西都原の東部の臺地端に近く設けられたる圓形古墳にして、鬼之窟古墳の東南約百五十間に位し妻町より御陵墓參考地に通ずる道路と西都原臺地の東部を南北に貫通せる新道との交叉點の西北に存す。墳は基底直徑約十間高十尺あり、上部稍平坦にして其の上に古木の切株二三を存するのみにて外部には雜草繁茂せり(第一圖參照)

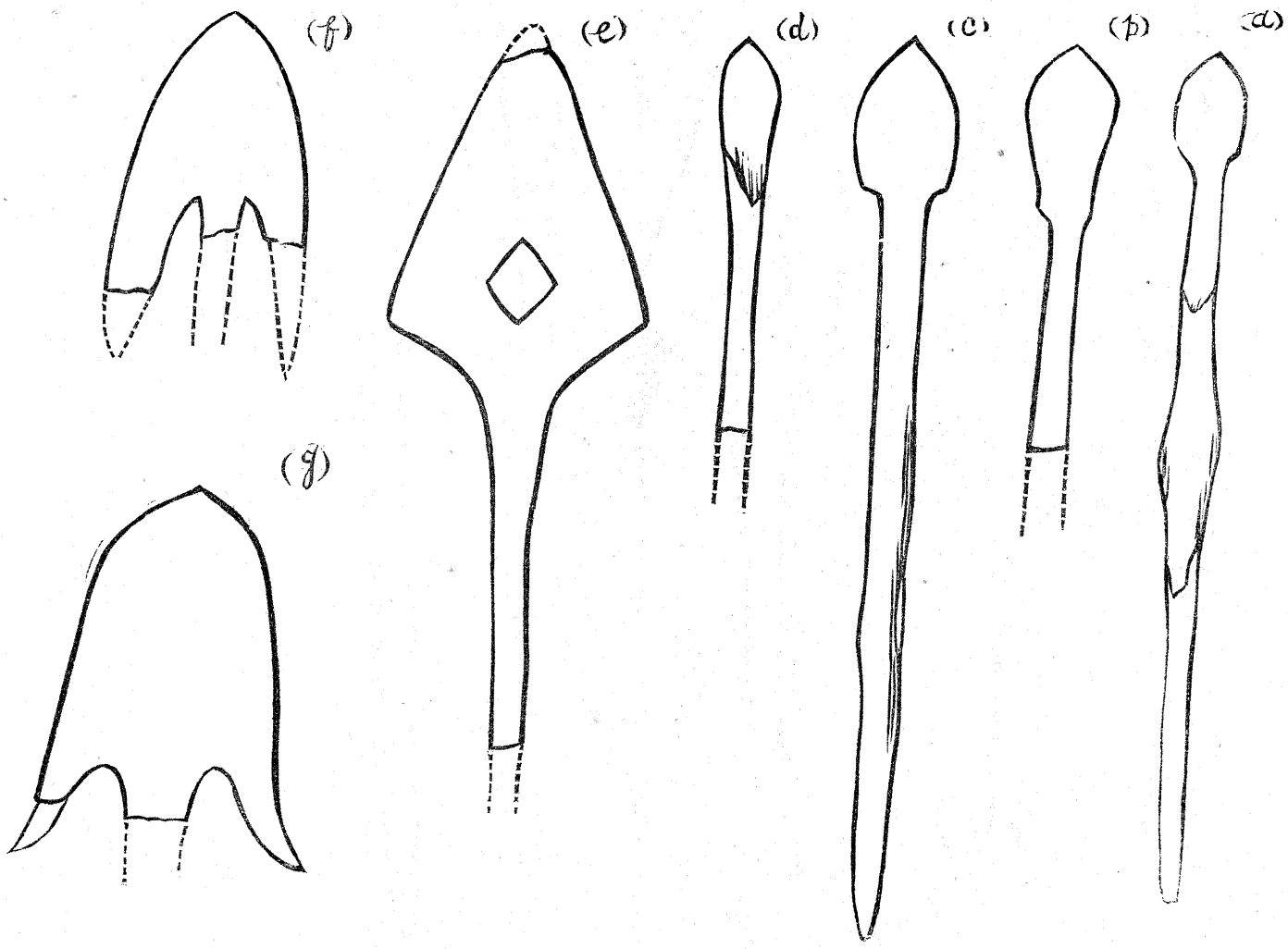
吾人は此の墳の頂上に略東西九尺南北十一尺の一區を劃して表土を除きたるが葺石の存在を認めず漸次此の部の發掘を進めたるに土質は主に黑色にして往々黃色の土を混じ輕鬆にして發掘頗を容易なり。表面より約四尺にして穴の南部に偏して齋瓮土器の破片三個を得たり。即ち此の部分を精査しつゝ發掘を續けたるが土壤は上部と同じく黑土に黃色土を混じて攪亂せられたる形迹あり、深さ六尺に及べるも遂に他に遺物を發見せず、嘗て密掘せられたるものと認めたるを以て工事を止めたり、

發見の土器は何れも破片の一小部分にして一は蓋杯の身の一部分に當り他の二片は大形の壺の一部分と覺しく內側に渦紋を有したり。是等は蓋し發掘の際破棄せられて混入するに至りしものならむ。

第一圖　無號B塚平面及側面圖　凡三百三十分之一



第六圖　船塚發見鐵鏃（實大圖）



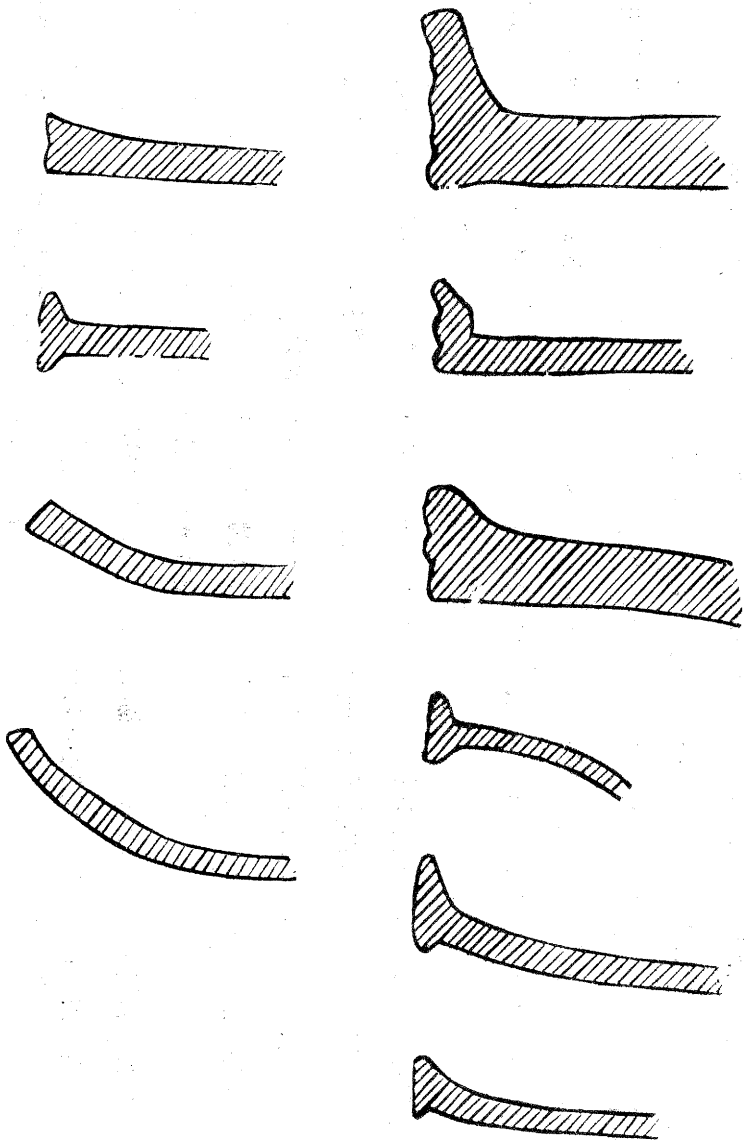
無號B塚

本古墳は西都原の東南部、第23號塚の東方臺地の端に設けたる小圓形古墳にして基底の直徑約八間高僅に一間(但し基底の東部は傾斜せるを以て此の部分は少しく高を增せり)外部は深く雜木に被はれたるを以て特に注意を拂ふに非ずんば往々其の存在を看過するに至るべし。

吾人は頂上に方約二間の區劃を設けて發掘を試みたるが表面には葺石なくただ西北隅に於いて地下約一尺內外に多數の素燒土器の破片を發見せり、これより全体に注意を加へ發掘せるに黑色の土質を見るのみにしてただ深五尺にして黃色の土の混在せるを認めたり。かくて漸く基底部に達せるが遂に遺物の存在を認めざるも或は南方に偏して埋葬せしに非ざるやと思考して更に二尺餘南方に掘り擴げたるも亦た何等の發見物なく乃ち發掘を中止したり。

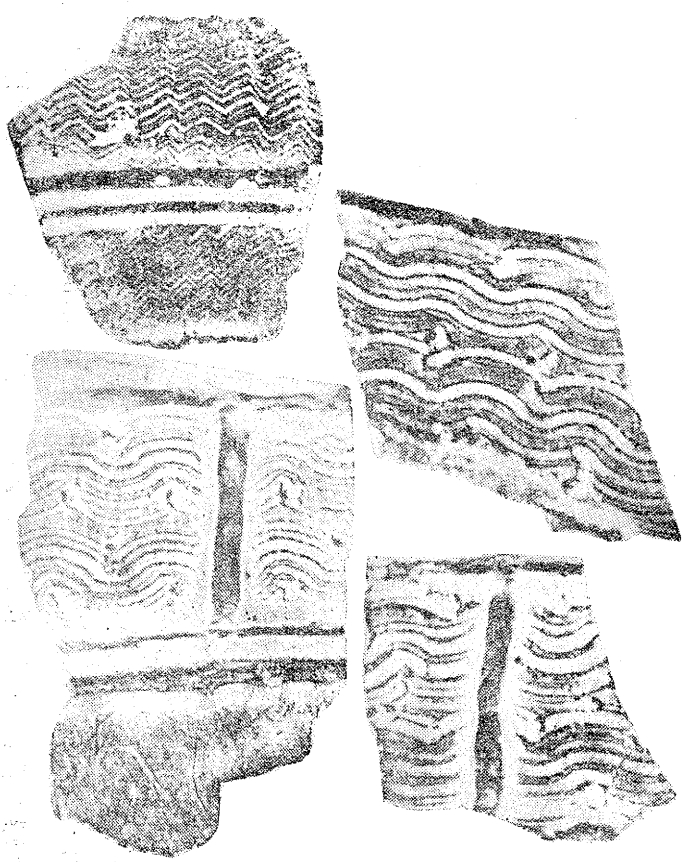
此の發見の土器は何れも破粹せるを以て其の原形の如何なるものなるかを明になし難きも、破片の形狀より推すに、多くは盤鉢高杯にして壺の類は存せざりしが如し。盤皿の類は數種の形式あり、其の各の口部の形式第二圖に示す如し。大さは明ならざるも破片を接合して考ふるに比較的大形にして徑一尺內外のもの多く盤の最大なるは徑一尺五寸に上れり。鉢の底の部分と認めらるものには徑五寸八分の四周の缺損せる水平なるもの、及び外部にツマミに類似せる圖形小突起を有するあり。また鉢の側面と思はるゝ部分には第三圖に示すが如き周劃を附して內部に波狀山形狀の文樣を現せるあり形式所謂彌生式土器に類似せるを見る。高

第二圖　無號B塚發見土器細部（實大圖）



抔は殘存せる部分脚多きが何れも大形にして脚には透しなく之に代ふるに一段若しくは二段に圓孔を有し形狀古墳發見の普通の齋瓮の高抔と異なり越前國坂井郡東十郷村の土器包含地より發見する寧ろ所謂彌生式に類似せる土器と同系統なり。而して凡て是等は素燒なるが其の手法を詐細に驗すれば三種あり、一は稍厚手の緻密にして表面滑なるもの、高抔は凡て是に屬せり。二は一見埴輪圓筒に類似し粗質なるもの前述の大なる盤は是れなり。第三は兩者の中間に位せる質を有し褐灰色にして薄手なり其の或物には羽毛目ありまた前述の如く文樣を有す。皿鉢の類皆此の手法なり。是等の土器は形狀より見れば上述の如く幾分彌生式に類似せる點あるも、手法よりせば古墳時

第三圖　土器外側面文樣拓本



代の土器に後るゝものたる殆んど疑を容れず。其の種類が鑿、皿、高杯等に限られたるは祭器に使用せられたるものなるを示せり。

さて此の古墳は其の內部攪亂されたる形迹を認めざりしも何等遺物藏せず、表面に近くかゝる土器を發見したるは特殊の例と云ふべく、大正三年八月此の古墳群の發掘調査の際第無號塚に同樣の事實ありし以外に學界に報告せられたるを聞かざるなり。其の何故然るやは吾人更に調査を進むるに從ひて明になすを得んか